

スリランカ国新マナー橋建設事業 —土木技術者の平和への貢献—

写真提供: 杉田 依久 (若築建設(株))
文: 石渡 幹夫 (正会員 土木学会 上級技術者 (独) 国際協力機構)



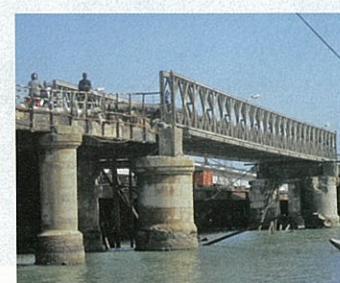
この国の人びとは長きにわたり苦しんできた。四半世紀に及んだ内戦は、昨年ようやく終結し平穏な日々が訪れている。プロジェクトは戦場となっていた北部のマナー県で、県庁がある約5万人が住むマナー市と本土をつなぐ唯一の橋を架け替えるというものである。現橋は20年ほど前に爆破され、以来、仮橋を車や人が行きかっている。現場は常に危険と隣り合っ

てであった。立ち上げ直後に砲弾が撃ち込まれ、3本の砂柱が上がった。ときには、自動小銃の乾いた音を聞きながら、闇夜の国道を疾走した。そして今、人びとが故郷に戻り始めている。わが家を直し、田畑を耕し、昔ながらの生活を取り戻そうとしている。この国が以前のように「インド洋の真珠」と呼ばれ、輝きを取り戻す日がくることを信じている。プロジェクトの詳細は、橋長は150mほどで6径間連結PC(ポストテンション)合成I桁橋、基礎はパイルベント式である。PC桁(長さ26m、重さ36t)は2台のクレーン合い吊りで架設された。合わせて、老朽化した約3kmの連絡道路も修復した。

▲ 新マナー橋全景。橋長157.1m(桁長26.0m)、全幅10.4m、6径間連結PC(ポストテンション)合成I桁橋、パイルベント形式基礎、取付道路453m



▲ コースウェイ全景。全長3140m、全幅11.0m、土留めはRCコンクリート逆T式と重力式擁壁、軟弱地盤対策として置き換え土工法採用



▲ 旧橋の状況。傷んだピアの上に仮設の桁が載せられている



▲ 生徒たちの社会科見学



▲ モニュメント。愛(マナ)の橋と名づけられた



▲ 平和の灯りをともし



▲ PCガーダーの架設状況